

「エコハウスのウソと真実」

住まいのウチイケで東大の前准教授が講演



セミナー冒頭、内池秀光社長が挨拶した

室蘭市内の地場ビルター、住まいのウチイケ（内池秀光社長）は1月15日、同社研修センターで「寒冷地における『エコハウス』と『変わる暖房』をテーマに環境セミナーを開催した。

第一部は東大の前准教授が「エコハウスのウソと真実」と題して講演した。

温熱環境の快適性は人の①着衣量②代謝量の2要素のほか③空気温度④壁温度⑤湿度⑥気流速度の計6要素で決まる。空気が暖かくても壁が冷たい部屋にいると寒く感じるという。

人が気持ちよく暮らす

には人の体の代謝熱と放熱量がバランスを保ち、足元が冷えるなどの局所的な不快を感じないことが理想的。それを少ないエネルギーで実現するためには導入する機器のほか、住宅性能や丁寧な設計・施工など表面的でないものが鍵になる。

前准教授は「道内ではエアコンに対してネガティブなイメージを持つケースが多いと思うが、エネルギー効率の高さや品揃えの豊富さ、機器の安価さなどのメリットがある」と強調。「少ない電力で暖房できるので将来的に電気料金がアップしても影響を少なく抑えら

れ、CO₂排出量削減にも貢献できる」と解説した。

より効率的にエアコンで暖房するには吹き出し温度の低温化が効果的。低温で暖房するには風量を要するため気流による不快感への配慮が求められるが、高温風に比べ室内をムラなく暖められるという。

室蘭市の住宅を赤外線カメラで撮影した写真を数枚示しながら、室内から熱が逃げている住宅は部位によって温度差があり、住宅性能が高い住宅は外壁面の温度がほぼ一定なことを説明。「エネルギーを無駄にしないために住宅の断熱・気密性能が不可欠」と強調した。

太陽光発電システムを搭載したZEHが注目を集めつつあるが、「まずは快適に暮らすための省エネや暖かさを意識し、エネルギーを大切に使える家を建ててほしい」と呼び掛けた。

第二部は、同社がコンソーシアムに参加してモデルハウスで実証中の、汎用エアコン1台による全館空調システム「コンフォート24」を開発したシステム環境研究所（東京都）の落合総一郎

社長がシステムの概要や導入実績などを説明した。同システムは札幌市の補助により（公財）北海道科学技術総合振興センター（フーステック財団）が支援する今年度の補助事業に採択された。

セミナー終了後は「コンフォート24」を導入したモデルハウスに場所を移し、参加者が全館空調システムの快適性を体感した。